

# 大 学 史 研 究 通 信

第 80 号 2014 年 12 月 31 日 (水)

大学史研究会

第 80 号の内容 : 会員ニュース・新入会員自己紹介・第 37 回大学史研究会セミナー報告・2014 年度総会報告・2014 年度会計報告・会員新刊ニュース・『大学史研究』編集委員会からのお知らせ・事務局からのお知らせ・退会者の報告・編集後記・大学史研究会事務局員一覧

## 会員ニュース

### 異動のあった会員

谷本 宗生 会員

新所属：大東文化大学

藤岡 真樹 会員

新所属：摂南大学外国語学部（非）

松本 智治 会員

新所属：学校法人幸福の科学学園

## 新入会員自己紹介

吉葉 恭行 会員 (2014 年 6 月入会)

このたび入会いたしました吉葉恭行（よしばやすゆき）と申します。専門は科学史・技術史です。『東北大学百年史』の編纂に携わったことを契機として、ここ 10 年ほど戦時研究と帝国大学をテーマに研究を進めてきました。とくに昭和 18 年度より実施された大学院特別研究生制度の成立経緯や実際の運用について、科学技術動員と関連付けながら分析してきました。また帝国大学の研究者たちの思考やその源となる知的基盤に関する研究や留学生の歴史に関する研究にも関心があります。どうぞよろしくお願いたします。

## 第 37 回大学史研究セミナー報告

2014 年 11 月 29 日（土）・30 日（日）、九州大学箱崎キャンパスにおいて、第 37 回大学史研究セミナーを開催いたしました。「開催校からの御礼」および「セミナー参加記」を掲載いたします。

### 開催校からの御礼

井上美香子（九州大学大学文書館）

2014 年 11 月 29 日（土）～30 日（日）に、九州大学箱崎キャンパス（会場 箱崎理系地区 21 世紀交流プラザ I 多目的ホール）にて、第 37 回大学史研究会セミナーを開催いたしました。九州での開催ということで、参加者人数が少ないのではないかと心配していたのですが、お陰様で 2 日間で、会員・非会員合わせて 32 名の御参加をいただきました。大学史研究会事務局員になってから、一度は本研究会セミナーを九州大学で開催したいと思っておりましたので、第 37 回セミナーを開催し無事におえることができ、本当にホッとしています。

セミナー第1日目(11月29日)のシンポジウムでは、「大学の存在意義を問うー大学と地域社会との関係からー」(九州大学大学文書館共催)と題し、木方十根氏(鹿児島大学):「近代都市の成立と大学町」、市原猛志氏(北九州市門司麦酒煉瓦館):「九州大学箱崎キャンパスをめぐる地域と人びと」、山本珠美氏(香川大学):「地方国立大学は地域社会とどう関わってきたかー高松高商の取り組みー」の3名のパネリストの方々、コメンテーターとして折田悦郎会員(九州大学大学文書館)にご登壇頂きました。本シンポジウムでは、1.大学の設立(あるいは大学の教育研究活動)が地域社会の形成にどのような影響を与えたのか。そして、2.地域社会の存在は教育研究活動を含めた大学の在り方にどのような影響を及ぼしたのか。この2つの論点について、大学と地域社会の関係について建築学的観点そして社会教育的観点からご報告を頂いた後、フロアを含めて非常に熱い議論が交わされました。

また、第2日目(11月30日)の自由研究発表では、松浦正博会員(広島女学院大学):「形成期パリ大学における大学団と托鉢修道会との対立をめぐって」、福留東士会員(東京大学):「ランドグラント・カレッジと実践的科学ーペンシルバニア農学校初代学長エヴァン・ピューによる初期の農業科学と教育ー」、山本尚史会員(九州大学大学文書館):「戦時下九州帝国大学における「文化交流」ー九州国際文化協会に着目してー」、香川せつ子会員(西九州大学):「ケンブリッジ大学における自然科学と女性ー1880年代から1910年代までを中心にー」の4名による研究発表がなされました。1発表1時間という本研究会での特色が生かされた自由研究発表では、それぞれ時間一杯に非常に深い議論が展開されました。

また、本セミナーでは、キャンパス見学会も開催いたしました。本シンポジウムパネリストでもあった市原猛志氏(北九州市門司麦酒煉瓦館)がキャンパスツアーのガイドを快くお引き受けくださり、とても丁寧な解説で非常に楽しい見学会を開催することができました。九州大学では、伊都キャンパスへの移転に伴う解体作業等で、箱崎キャンパスの風景は日々変化しつつあります。見学会をとおして、会員の皆様の記憶のなかで箱崎キャンパスが生き続けることができれば幸いです(全国から沢山の方々がお越しくくださったので、箱崎キャンパスもきっと喜んでいただきたいと思います)。

最後に、無事にセミナーを終えること出来ましたのも、シンポジスト、自由研究発表の皆様、そして、ご参加頂きました皆様の御蔭だと思います。特に、非会員であるにもかかわらずご快諾くださり、パネリストとしてご登壇して頂きました、木方十根先生、山本珠美先生、市原猛志先生には改めて心から感謝申し上げます。また、自由研究発表の皆様、そして、ご参加頂きました皆々様に厚く御礼申し上げます。

### 第37回大学史研究会セミナーに参加して

山本珠美(香川大学)

このたび大学史研究会にはじめて参加させていただきました。初日のシンポジウム、2日目の自由研究発表と、二日間にわたって大変刺激的な時間を過ごすことができました。これもひとえに事務局および会場校である九州大学文書館の皆様方のご尽力あってのことです。ありがとうございました。

明治・大正・昭和初期の資料を読んでいると、時に既視感をおぼえることがあります。今回のテーマとなった地域社会との関係などは最たるもので、特に地方都市の高等教育機関の沿革史などに目を通せば、現在のCOCに関する議論は決して新しいものではなく、むしろ古くからある問題であることが分かります。オープン・キャンパスも、カタカナでそう呼ばれるようになったのはここ数十年のことかもしれませんが、明治30年代に「校内開放」として年中行事に位置づけていた学校もありました。教職員・学生が地域社会でさまざまに交流した事例は、簡単に探し出すことができます。「過去の大学=象牙の塔」「現在(未来)の大学=開かれた大学」という簡単な

二分法では語れないはずなのですが、例えば文科省やマスコミ、あるいは大学人自身からそのような図式が語られると、違和感を覚えます（予算獲得のため「戦略的」「確信犯的」に語っている可能性は否定できません）。

ただし「同じことが（用語を変えて）語られ続けている」この意味は改めて考える必要があるでしょう。限られた学生を対象とする教育活動と違い、「地域社会」という定義が極めて難しいものを相手に何かをする場合、どこまでやれば「開かれた大学」と言えるのか、ゴールは見えにくい。人的にも予算的にも制約がある中でできることは限られますから、粗はいくらでも見つけられます。おそらく、これからも同じ話は延々と繰り返されるでしょう。その中で、大学がより積極的にやるべきこと、大学でなければできないことを、我々現在大学に関わる者は常に考え続けていく必要があります。地域社会というフィルターを通して大学を眺める作業によってこそ、大学の存在意義の一面（すべてではないにせよ）が見えてくることは間違いありません。

大学史研究の意義は、もちろん歴史を明らかにすることにあるわけですが、歴史を踏まえつつ現在の大学をどう未来に発展・継承させていくのか、そのことを考える素材を提供することにあると思います。それは私が大学史を専門にしている部局ではなく、生涯学習教育研究センターという地域社会との連携を日々実践していかなければならないポジションにいるから、とりわけ強く感じるのかもしれない。

ところで、別件になりますが、「トリビア好き歴女」としてツボだった話も書こうと思います。二日目、市原先生の案内による九州大学箱崎キャンパスツアーは大変興味深く、なかでも大正時代にある建物が焼失したのは土地の神の「祟り」である云々と公式文書に記載があるという裏話には、吃驚すると同時に「さも有難い」とも思いました。というのも、似たような話は香川大学にもあるからです。

研究会当日に地図でお示ししたとおり、香川大学幸町キャンパスの最寄駅である JR 高松駅（正確には最寄駅は昭和町駅ですが、列車の本数が少ないため高松駅から徒歩 or 自転車が多数）は、キャンパスから見て北東にあたります。高松駅に向かうには、北東の角に門があると便利なのです。

しかし北東はいわゆる「鬼門」です。戦前、幸町キャンパスの南半分にありました高松高等商業学校（現香川大学経済学部・法学部）は、まさにこの鬼門の位置に正門がありました。大正時代、校舎建築中に骨組が倒れてしまったこと、また、昭和 20 年、空襲でキャンパスが一面の焼け野原になってしまったことは、いずれも鬼門を開けていたからではないかと、まことしやかに語られたそうです。現在、南キャンパスの北東角に門はありません。

一方の幸町キャンパスの北半分、戦前の香川師範学校、現在の香川大学教育学部。こちらは北東の隅に通用門があったのですが、南キャンパスにあわせて閉鎖されました。しかし高松駅までの最短ルートですから、塀を乗り越える学生が続出します。1990 年代のある日、この場所に通用門を設けるといふ議題が教授会に提出されました。果たして、喧々諤々の大論争勃発！鬼門「閉鎖派」と「開放派」の戦いは、最終的に開放派が勝利をおさめました。

鬼門を閉じた南キャンパス、開けた北キャンパス。数十年後、あるいは数百年後、どのような運命を辿ることになるのでしょうか？大学建築の配置に関することですので、ここは木方先生のご意見を伺ってみたいところです。

似たような話はどのキャンパスにでもあるのではないのでしょうか。科学的思考、近代的思考の持ち主が集まっているはずの大学で、このような非科学的、前近代的な話が真面目に語られていることを、私はとても面白いと思います。研究論文としてまとめるのは難しそうですが、『学校の怪談』ならぬ『大学の怪談』は書けるかもしれません（?）。

それはさておき、それぞれのキャンパスにはそれぞれの物語があります。そして、その物語はキャンパスに集う教職員・学生だけで作られたものではなく、地域社会の多様なステークホルダーたちとともに形成されてきました。そのことを改めて考えさせられた二日間でした。

## 第37回大学史研究会セミナー参加記

田中智子（立教大学立教学院史資料センター）

第37回大学史研究会研究セミナーは、11月29日、30日の2日間にわたり、九州大学箱崎キャンパスで開催された。会員になってから2回目のセミナー参加であり、場所も筆者が住む関東からは遠い九州での開催となったが、遠路はるばる参加したことを後悔させない、充実した内容であった。

1日目は九州大学大学文書館との共催で、シンポジウム「大学の存在意義を問う—大学と地域社会との関係から—」が開催された。木方十根氏（鹿児島大学）・市原猛志氏（北九州市門司麦酒煉瓦館）・山本珠美氏（香川大学）のお三方が登壇され、それぞれの専門分野から大学と地域社会との関係についての報告を行った。木方氏は、建築学・都市計画の立場から、近代日本における大学町の形成について報告された。市原氏も、建築学・産業考古学の立場から、九州大学箱崎キャンパスをめぐる地域と人々について報告された。そして山本氏は、生涯学習の立場から香川大学の前身校である高松高等商業学校が地域社会とどのように関わってきたかについて報告された。筆者はこれまで教育史という立ち位置から大学史を研究してきたが、お三方とも異なる専門分野から異なるアプローチの仕方での大学について研究されているのが、非常に新鮮で興味深かった。

2日目の自由研究発表においては、例年に比べて多い4件の報告があった。松浦正博氏（広島女学院大学）は形成期パリ大学における大学団と托鉢修道会との対立について、福留東士氏（東京大学）はペンシルバニア農学校初代学長エヴァン・ピューによる農業科学と教育について、山本尚史氏（九州大学大学文書館）は戦時下九州帝国大学における文化交流事業について、香川せつ子氏（西九州大学）は1880-1910年代までのケンブリッジ大学における自然科学と女性研究者について報告された。4件中3件が欧米の大学についての報告ということで、日本教育史専攻の筆者にとっては見聞を広げる貴重な機会となった。

そして今回は、自由研究発表の後に箱崎キャンパス見学会が行われた。箱崎キャンパスは2019年に伊都キャンパスに全面移転を予定しているため、今後見学出来る機会はそう多くはないであろう。あいにくの大雨で見学箇所は大幅に縮小されたが、パネリストの一人でもある市原氏が工学部本館会議室の青山熊治の壁画等について詳細な解説をしてくださったおかげで、短時間の見学も大いに楽しむことが出来た。

シンポジウムにしても自由研究発表・キャンパス見学会にしても、もう少し時間がほしいと思わせてくれる内容であった。パネリストおよび自由研究発表をされた方々、そして今回のセミナーを企画・開催された事務局の方々、九州大学大学文書館の方々に厚く御礼を申し上げます。

### 2014年度総会報告

第37回大学史研究会セミナーに引き続き、2014年度の総会が開催されましたので、その議事録を掲載いたします。

### 大学史研究会 2014年度総会議事録

2014年11月29日 於 九州大学 21世紀交流プラザI 多目的ホール

文責（セミナー担当：井上美香子）

#### 1. 2014年度の活動

##### 1.1. 事業報告

岡田局員より、本年度はニュースレター『大学史研究通信』を4号（76,77,78,79号）刊行する

とともに、第 37 回大学史研究セミナーを九州大学で開催したとの報告があった。

#### 1.2. 紀要『大学史研究』25 号について

岡田局員より、2013 年 11 月に第 25 号の刊行を行ったとの報告があった。

#### 1.3. 2014 年度決算の報告・会計監査報告

会計補佐の山崎局員より、決算報告が行われた。続いて監査の吉野剛弘会員より、今年度も問題なく会計業務が執行されていることが報告されたのち、決算が承認された。

## 2. 2015 年度の活動

### 2.1. 事業計画

岡田局員より、次年度はニュースレター『大学史研究通信』を 4 号 (80,81,82,83 号)刊行の予定とし、第 38 回大学史研究セミナーを南山大学で開催することが提案された。

### 2.2. 紀要『大学史研究』26 号について

岡田局員より、2014 年度末をめどに第 26 号の刊行を行う予定との報告があった。

### 2.3. 会員名簿の発行について

岡田局員より、2014 年度は会員名簿発行の年に当たるので、異動があった会員は前号『大学史研究通信』に同封の用紙またはホームページ掲載のフォームを用いて連絡してほしいとの報告があった。

### 2.4. 2015 年度予算の提案

山崎局員より来年度予算が提案されたのち、全会一致で承認された。

## 2014 年度会計報告

大学史研究会 2014 年度会計ならびに 2015 年度予算案につきまして、以下に概要をご報告いたします。

### \* 2014 年度の収支報告

#### 【 収入 】

2013 年度会計からの繰越金は、5,039,970 円でした。2014 年度年会費につきましては 74 名の会員より納入いただき、年会費・入会金の納入総額は、491,000 円でした。年会費の納付率自体は 58.7%であり、概ね前年通りの納入率となりました。また、昨年も申し上げましたが、年会費納入時期がずれている方がおありまして、厳密に言えば半年程度払うのが遅れている方がいます。そのため、現在の納入率はかなり低くなっていますが、1 年前のものをみるとおおよそ 80%になっています。ここで申し上げたいことは、もちろん引き続き納入率 100%となるための取組みを進める必要もありますが、同時にこれ以上の大幅な年会費収入の増加は現時点ではありえないということをお伝えしたいと思います。

いずれにせよ、年会費をお納め下さった会員各位におかれましては、この場を借りてお礼申し上げますとともに、今後も引き続き研究会の発展と円滑な運営のために、年会費納入に対するご理解ご協力をお願い申し上げます。

その他の収入としましては、『大学史研究』（紀要）の売上金、29,850 円がありました。2014 年度の総収入額としましては、5,564,888 円、前年度繰越金を除いた実収入額は、524,918 円でした。

#### 【 支出 】

2014 年度は無事に学会誌が刊行されまして、それに伴い大学史研究関連費用の支出が発生しています。編集委員会会議費・交通費は 18,000 円、印刷費は 26,020 円です。これは「大学史研究通信」発行の印刷、会員への諸連絡の印刷物、あるいは、年会費納入依頼通知の印刷等に関わる

経費です。

通信費の支出は、47,625 円です。これは、「大学史研究通信」の発送、年会費納入依頼通知の発送、セミナーの出欠調査ハガキや、その他宅配便等の経費です。

消耗品費・手数料は、21,600 円です。これは、事務局運営にあたっての文房具・ラベル・用紙・送金手数料等の経費にあたります。

前期損益修正損は、山崎の作成した帳簿に一部支出の記載漏れがあったため、前年度繰越金が実際よりも多くなっており、それを修正するためのものです。内容は前々回の学会の収支関連とインターネット関連の費用になります。帳簿自体がそもそも間違っていたため、会計監査をして頂いた書類自体が間違っていました。この場でお詫びをさせていただきます。また、再発防止のため、帳簿自体の作り方を変更し、間違えないように工夫をしています。なお、使途不明金等はございません。

次年度繰越は、4,781,476 円、来年度繰越金を除く総支出は 783,412 円でした。繰越金を除く収支の差は、258,494 円のマイナスとなりました。前期損益修正損を省いても 180,000 円程度のマイナスです。

「2014 年度会計報告」に明記されているとおり、当該年度の会計は吉野剛弘会員に監査を依頼し、精細な監査の上会計の適正処理をご承認いただきました。御多忙のところ監査業務を賜りました吉野会員には、この場を借りてお礼申し上げます。

### **\* 2015 年度の予算案**

大学史研究会では、次年度の予算案につきましては、事務局による基本案を総会に提示し、ここでの審議を経て、最終決定をいたしております。

例年と同様、2015 年度予算も上記の手順にしたがって予算案を決定しましたので、以下にご報告いたします。

#### **【 収入案 】**

収入は、年会費と紀要売上金の 2 つになります。とりわけ、本研究会の運営経費は、年会費の納入に大きく依存しております。

年会費につきましては、前年度並みの 600,000 円を収入予定額として設定いたしました。繰り返しで恐縮ではありますが、2015 年度も会員各位のご理解ご協力をお願い申し上げます。

紀要売上金は、昨年度までの売上金を参考に 30,000 円としました。このような金額を収入予定に組み込めるのは、編集委員会の方々のご尽力により売り上げを伸ばしていただいていることが関わっております。この場を借りてお礼申し上げますとともに、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

総収入額は 5,442,476 円、繰越金を除く総収入額は 661,000 円といたしました。

#### **【 支出案 】**

支出案は、例年の予算案で設定している支出項目と支出額を考慮しつつ、算出いたしました。『大学史研究』を発行する予定になっております。その発行経費（制作・印刷・発送費の総計）を 600,000 円計上しました。

編集委員会会議費・交通費は 50,000 円、事務局会議・交通費は昨年度の実績を踏まえ 40,000 円としました。

その他の諸経費も、ほぼ例年通りの額を計上しております。消耗品費・手数料は 20,000 円、謝金は 40,000 円、印刷費は 220,000 円です。これは、来年度は名簿の印刷がありますので、それに伴うものです。通信費は 40,000 円でこれはホームページの費用も含んでいます。予備費として昨年は少なすぎるといふ指摘がありましたので、500,000 円を計上しております。

2014年度から次年度への繰越金は3,932,476円、繰越金をのぞく総支出予算案は1,510,000円を予定しております。

本研究会におきましては、全体として緊縮財政をうたってはおりますものの、研究会として有益と認め得る支出につきましてはやぶさかではありません。大学史研究会の発展のため、あるいは、会員サービスのために必要な支出の要請がありました際には、事務局で検討し、それが妥当であると判断した場合には、これにお応えしていきたいと考えております。今後とも会員各位からのご提案ご教示を歓迎いたしますとともに、研究会の将来的なビジョンも併せてご検討いただければ、幸いに存じます。

以上、「2014年度会計報告」および「2015年度予算案」につきまして、ご質問ご提案等ございましたら、事務局までご連絡のほどよろしくお願い申し上げます。

(事務局会計担当：山崎慎一)

大学史研究会 2015年度予算案

収入の部		支出の部	
費目	金額	費目	金額
前年度繰越金	¥4,781,476	雑誌「大学史研究」関連費用	¥600,000
年会費・入会金	¥600,000	編集委員会会議費・交通費	¥50,000
「大学史研究」売上金等	¥30,000	事務局会議・交通費	¥40,000
セミナー開催経費等戻し入れ	¥30,000	消耗品費・手数料	¥20,000
利息	¥1,000	謝金(アルバイト)	¥40,000
		印刷費(名簿印刷含む)	¥220,000
		通信費	¥40,000
		予備費	¥500,000
		次年度繰越金	¥3,932,476
計	¥5,442,476	計	¥5,442,476
前年度繰越金を除く総収入	¥661,000	次年度繰越金を除く総支出	¥1,510,000

大学史研究会 総会 資料 (2014年11月29日：九州大学)			
大学史研究会 2014年度 会計報告 (自2013年10月1日～至2014年9月30日)			
収入の部		支出の部	
前年度繰越金	¥5,039,970	雑誌「大学史研究」関連費用	¥580,902
年会費等	¥491,000	編集委員会会議費・交通費	¥18,000
学会誌販売	¥29,850	消耗品費・手数料	¥21,600
第36回セミナー開催経費等戻し入れ	¥3,091	印刷費	¥26,020
利息	¥977	通信費	¥47,625
		前期損益修正損	¥89,265
		次年度繰越金	¥4,781,476
計	¥5,564,888	計	¥5,564,888
前年度繰越金を除く総収入	¥524,918	前年度繰越金を除く総支出	¥783,412
		上記差引	¥-258,494
		上記のとおり、ご報告いたします。事務局会計担当 山崎慎一	
		上記の会計報告について会計監査を実施した結果、領収書ならびに預金通帳等は、全て妥當かつ正確に処理されていることを認めましたのでご報告いたします。	
会計監査		山崎 同弘	

会員新刊ニュース

別府昭郎『近代大学の揺籃——八世紀ドイツ大学史研究——』知泉書館、2014年4月  
H.ボーツ、F.ヴァケ(著)池端次郎、田村滋男(訳)『学問の共和国』知泉書館、2014年12月

『大学史研究』編集委員会からのお知らせ

『大学史研究』26号は、2012年に開催されたセミナーを基にした特集に、中山茂先生の追悼小特集を加えた形にして、今年度末に刊行させる方針で進めたいと思います。この機会に中山先生との思い出をご寄稿されたい会員の方は、事務局紀要担当の岡田(daishi@home.nifty.jp)にお知らせください。そのため、当初2014年11月の刊行と申し上げていたのが遅れることとなってしまいます。申し訳ありません。投稿原稿は引き続き受付をいたしますので、編集委員会スケジュールなど事務局紀要担当宛にお問い合わせください。次回は1月23日の予定です。

(紀要担当：岡田大士)

## 事務局からのお知らせ

前回の通信にて、会員名簿作成のための記載情報更新のお願いをいたしました。まだお済みでない方は、ホームページの「研究会事務局」をクリックされ、中ほどにある連絡用フォームにてご連絡ください。九州大学箱崎キャンパスで開催された大学史研究セミナーは、3名のパネリストの方による興味深いご講演や、意欲的な自由研究、さらに雨交じりの中ではあったものの楽しいキャンパス見学と、大変充実した2日間となりました。改めて3名のパネリストの先生方、開催準備に当たられた井上美香子事務局員、新谷恭明会員、折田悦郎会員、山本尚史会員にお礼を申し上げます。

(事務局代表：岡田大士)

## 編集後記

九州大学では、充実したセミナーに参加させていただき、大変、勉強になりました。大学と地域の関係は私自身が大きな関心を寄せているテーマだけに、多様な側面からのアプローチの可能性に新たな発見がありました。キャンパスツアーでは、とっておきの会議室にいらしていただいたり、建物の興味深い逸話をうかがったりと、市原先生の素晴らしいガイドで楽しく有意義にすごさせていただきました。井上先生はじめ、ご尽力いただいた先生方に御礼申し上げます。

さて、来年は、南山大学(名古屋キャンパス)でのセミナー開催の運びとなりました。今回のシンポジウムで木方先生ご紹介くださった「レイモンド建築」でも有名なキャンパスで、地下鉄名城線名古屋大学駅または八事日赤駅から徒歩10分程度です。九州での手厚いおもてなしには到底及びませんが、精一杯、準備させていただきたいと思います。ぜひお越しくださいますよう、よろしく願いいたします。

(通信担当：五島敦子)

『大学史研究通信』第80号の編集は、事務局・五島敦子が担当いたしました。

連絡先：agoshima @nanzan-u.ac.jp

『大学史研究通信』第81号は、2015年2月28日発行予定です。

### 大学史研究会事務局

<事務局連絡先>

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

中央大学法学部 研究室受付 岡田大士気付 大学史研究会

Tel&Fax: 042-674-3151 E-mail: daishi@home.nifty.jp

ホームページ <http://daigakushi.jp/>

事務局へのお問い合わせは、なるべく下記代表Eメールアドレスまでお願いいたします

E-mail: jshshe@daigakushi.jp

### 大学史研究会事務局員(五十音順)

浅沼 薫奈 (大東文化大学)

井上 美香子 (九州大学大学文書館百年史編集室)

岡田 大士 (中央大学)

五島 敦子 (南山大学短期大学部)

長谷部 圭彦 (駒澤大学等)

深野 政之 (大阪府立大学)

山崎 慎一 (桜美林大学)